「「朝鮮資料」から見た中・近世の俗語と日常語」研究経過成果報告書

朴　　真　完*

要　旨

当該研究の一つとして本年度は，東京大学小倉文庫所蔵『代疑論』と『韓語』を対象にし，19 世紀末から 20 世紀までの文法面での変化を分析した。

編著者の中村庄次郎は『韓語』の作成時に，『代疑論』の用例を分析しながら，様々な助詞と語尾を見出し語としてリスト化し，文法形態の索引を作った。彼は『代疑論』の中で，独自の文法論的な視点から文法形態を分類し，話階（相対敬語法の等分）を設定するなど，体系的な記述を試みた。また，両書はすべて問答形式のテキストを豊富に載せており，両書を活用して口語に頻繁に登場する文法形態や文型の練習を可能にした。

しかし，形態分析に失敗した例や，助詞と語尾の表記には誤写が見られる。また『代疑論』に関しては，日本語訳が途中で中断されているので，本書は未完成の段階であったことが窺える。

朝鮮語文法史の記述に貢献する点として，新しい語尾の出現を指摘することができる。まず，19 世紀末 '-ji（yo)' が約束法の終結語尾として使われている。またこの時期に初めて登場する，新形の接続語尾として「理由」の意味で使われる '-giro, -gilnɔi' が確認できる。このように両書で記された内容は，朝鮮語文法史の記述にも裨益するところが大きい。

何より文法書『代疑論』と『韓語』の存在を通じて，19 世紀末，日本人を対象とした朝鮮語文法教育が実際に行われていたという事実を確認することができる。

キーワード：助詞（particle)，接続語尾（connective ending)，終結語尾（sentence-final ending)，相対敬語法（addressee honorifics)，朝鮮語文法教育（education of Korean grammar）

1. 学術的背景

「朝鮮資料」は，朝鮮時代司訳院で日本語通訳官を養成するために編纂した教科書，例えば会話教科書『捷解新語』（原刊本 1676 年)，辞書『倭語類解』（1780 年代）など，中・近世日本語に関する教科書類が中心となっている。また日本における朝鮮語通詞教育のために 19 世紀末まで使われた教科書類，『隣語大方』『交隣須知』など近世朝鮮語を反映する文献も多数含まれる。

* 京都産業大学外国語学部アジア言語学科教授

「朝鮮資料」の研究は，日本語史・朝鮮語史・文献学という 3 つの領域に精通する必要があるほど，研究者の層が薄い分野である。中でも「朝鮮資料」の日本語を分析するためには，中・近世日本語のみならず，古代日本語研究も視野に入れつつ，日朝両言語の歴史的な変遷に関する研究を総合的に行う必要がある。

形式面で見ると，「朝鮮資料」は日本語の原文に朝鮮語で翻訳を付ける「対訳」という特殊な形式を取っており，さらに本文はテキストの内容は変えず，日本語の変化がある箇所のみを改訂しているので，両国語の対照分析を通して，日本語と朝鮮語の歴史，特に中・近世語の姿を再現することは勿論，中世から近世までの日本語と朝鮮語の歴史的な変遷を把握できる絶好の資料となる。

2. 研究目的と研究方法

研究テーマ「「朝鮮資料」から見た中･近世の俗語と日常語」の目的は，「朝鮮資料」を用いて，中･近世の俗語と日常語を再現し，その言語的な特徴を明らかにすることである。そのために「朝鮮資料」のうち日本語史の記述に役に立つ新資料をできる限り幅広く収集し，「朝鮮資料」における中・近世日本語のデータベースを作成する。時代別に日本語と朝鮮語を対照し，通時的な変遷過程を比較する方法で，口語の変遷過程は勿論，「武士詞」を中心とした位相と関わる諸問題を解決していく。

具体的には「朝鮮資料」の中で「口語性」を反映する文献を対象に，以上の研究方法を活用し，中･近世日本語の話し言葉における，(1) 日常語・俗語の問題，(2) 使用階層の問題を中心に分析していく。また派生研究として，朝鮮資料は「日本語と朝鮮語の接触と影響関係」の問題を解決するための重要な手がかりを提供する。しかし，二千余年にわたる両国間の交流において，二つの言語が接触するようになった結果，両国語に干渉が起きることは十分予想される。その間，朝鮮語の語彙体系に与えた日本語からの干渉は勿論，朝鮮資料に現れる異常な日本語の調査や，その出現理由について詳細に検討する。史的対照言語学の観点から，中・近世語における以上の諸問題を究明することを本研究の主な課題とする。

本年度は多角的観点から「朝鮮資料」の分析を行い，日本語史と朝鮮語史と関わる諸問題の解決に向けて研究してきた。具体的に言うと，歴史的な観点から日本語と朝鮮語を比較して，その関連性を解明すると共に，共時的な立場から 17 世紀から 19 世紀にかけての両言語を各面にわたって対照してきた。その過程で両国語の中・近世における変化の諸問題を把握し，両国語を徹底的に対照するとともに，両国語の歴史的な変化を対照する時にも，現代語における両国語の対照研究の成果を積極的に活用した。

3. 研究成果の概要

「朝鮮資料」の本文中には日本語をハングルあるいは朝鮮字音で記した箇所が多いため，朝鮮語との対照分析を通して 17 世紀から 19 世紀末にかけての音韻・文法・語彙の変遷について記述できる。特に本年度は新資料の発掘にも努め，日本語と朝鮮語の研究資料に資するものとして，東京大学小倉

文庫所蔵『代疑論』（1880 推定）と『韓語』（1881）を学界に公表し，その内容を細かく分析した。

『韓語』の編著者である中村庄次郎（1855 ～ 1932）は，『代疑論』の中から助詞と語尾（接続助詞や終助詞に該当）を抜粋し，それらを見出し語として立てた。その後，見出し語の下にそれらと関連する代表的な例文を載せる方法で編纂した。見出し語として文法形態を当てたことからも分かるように，『韓語』は朝鮮語の助詞・語尾などの文法形態を収録した一種の「文法索引」である。特に例文を挙げる時には，会話の状況に応じて，「質疑―応答」という問答形式の多様な会話を提示することで，口語的な表現の習得に力を入れていたことが窺える。

これに対して『代疑論』では，対話の状況を反映した見出しが設定されているが，その状況で使われる各種語尾の形や例文が「質問―応答」の形式で提示されている。この点では，『韓語』の記載方式と共通している。特に相対敬語法の「話階」（speech level）によって終結語尾が分類されるなど，体系的な文法記述を試みたことは注目に値する。

さらに一部の見出しに関しては，文法機能を中心に設定され，その下に関連した形態および用例が並べられている。見出し語と文法説明の中には西洋文法の記述に使われる文法範疇（grammatical category），例えば人称（person），時制（tense）などと関連する用語が見られる。

これと関連して『韓語』の後半部（57 丁から 85 丁まで）に収録されている「韓佛字典拔萃」に注目する必要がある。つまり『韓語』の編纂の際には，『韓佛字典』（1880）最初の付録（PREMIER APPENDICE）である「動詞活用表」（CONJUGAISON ALPHABETIQUE）が参照された可能性が高い。おそらく編著者の中村庄次郎は『韓佛字典』を参考にして，独自の文法書『韓語』の編纂を企画したと考えられる。

この時，『韓語』は文法形態の説明が，『代疑論』は文法論の説明が中心であるため，両書は相互補完的に使われていたと推定される。両書における共通した見出しの存在や使用例文における一致などを考慮すれば，『韓語』は「文法索引」として，『代疑論』は「文法書」兼「文法用例集」として同時に活用されたと考えられる。

4. 研究活動報告

当該研究成果は，査読付き国際学術雑誌への投稿手続きを進め，学術論文として刊行された。具体的な研究活動報告は以下のとおりである。

朴真完「19 世紀末における日本人のための韓国語文法教育の実際―小倉文庫所蔵『代疑論』と『韓語』を分析の対象に」（原題：19 세기말 일본인을 위한 조선어 문법 교육의 실제― 小倉文庫本『代疑論』과『韓語』를 대상으로），『韓国語学』（韓国語学会）91，2021 年 5 月.

参考文献

安田章（1990）『外国資料と中世国語』三省堂，頁 1-370

朴真完（2013）『「朝鮮資料」による中・近世語の再現』臨川書店，頁 1-431

朴真完（2015a）「草梁館語学所の朝鮮語教育方式の研究―『復文録』の分析を通じて」『韓国語教育』26-2，頁 97-124

朴真完（2015b）「苗代川本『対談秘密手鑑』の研究 ―薩摩藩朝鮮通事の言語学習をめぐって」『国語国文』（京都大学）84-5，頁 1-29

朴真完（2016）「草梁館語学所『復文録』の成立過程 ―復文教育における原文確保の方法と関連して」『韓国語学』（韓国語学会）72，頁 85-119

朴真完（2019）「東京外大本『交隣須知』（1881）の校訂様相を通じて見た 19 世紀末～ 20 世紀初の相対敬語法体系」『韓国語学』（韓国語学会）82，頁 31-72

A Report on “Common expressions of Medieval and Late Medieval Japanese and Korean in the Korean Materials”

Jinwan PARK

Abstract

This research investigated grammatical change in the Korean Materials from the 19th century to the 20th century in a comparative analysis. A collection of Korean materials was analyzed which contribute to explaining the history of grammar, including grammar books, such as *Dai-gi-ron*（代疑論 , 1880s）and *Kan-go*（韓語, 1881）.

When Nakamura Shojiro（中村庄次郎）wrote *Kan-go*（韓語）, he listed various particles and endings as headwords, and indexed the grammatical form, analyzing example sentences of *Dai-gi-ron*（代疑論）. He tried a systematic description of Korean grammar in *Dai-gi-ron*（代疑論）, such as classifying grammatical forms from a unique grammatical point of view and setting a rule for division of addressee honorifics. In addition, these two books have abundant question-and-answer texts, which enables Japanese to learn grammatical forms and practice sentence patterns that frequently appear in colloquial expressions.

However, there are some cases where morphological analysis has failed, and spelling errors are found in the particles and endings. In addition, it can be considered that stopping the Japanese translation in *Dai-gi-ron*（代疑論）in the middle of the text is a negative aspect for a grammar book.

The appearance of new endings in *Kan-go*（韓語）and *Dai-gi-ron*（代疑論）can be pointed out as a contribution to describing the history of Korean grammar. First, at the end of the 19th century '-ji (yo)' was used as a commissive（約束法）sentence-final ending. In addition, the new forms of connective endings appearing at this time were '-giro, -gilnɔi' for the meaning of [reason]（理由）.

Above all, it can be proven that the education of Korean grammar for Japanese learners was actually conducted at the end of the 19th century by analyzing grammar books such as *Kan-go* and *Dai-gi-ron*.

Keywords : particle（助詞）, connective ending（接続語尾）, sentence-final ending（終結語尾）, addressee honorifics（相対敬語法）, education of Korean grammar（朝鮮語文法教育）